

九州地方の弥生時代住居

I 壇穴住居の平面形式

II 壇穴住居の構造形式

III 壇穴住居の屋内施設

IV 掘立柱建物

宮 本 長 二 郎

弥生時代において九州地方は、他の地方に先駆けて大陸および半島の先進文化をとり入れた地方であり、それが九州地方の弥生文化の形成にどのように影響し、展開して行くか非常に興味深いところである。

住居においては、縄文時代以来の竪穴住居に加えて、米作り文化とともに移入された掘立柱建物と高床式建物が新たに登場した時代である。竪穴式住居は米作りによる農耕社会の発展とともに、九州地方では弥生時代前期後葉以降に急激に増加して、弥生時代集落の主役の地位を保つが、掘立柱建物と高床式建物の出現は、集落構成に多様化をもたらし、発見遺構例は少ないと云え、弥生時代社会の形成に大きな役割を果たしたものと思われる。

鹿児島県鹿屋市王子遺跡は、弥生時代のそのような集落構成を知ることのできる数少ない一例であり、また、個々の竪穴住居と掘立柱建物の性格を分析することも可能と思われる稀有な例である。

王子遺跡は中期末～後期初頭の比較的短期間の集落であるが、この時期にこのような集落がどのように成立したのかについては、九州地方の弥生時代文化全体の流れの中で位置付けていかなければ分からぬ。

本稿では王子遺跡を含めて、九州全域の弥生時代集落遺跡97件、650棟程の竪穴住居の分析を試み、次いで掘立柱建物をとりあげ、弥生文化の住居建築上の背景について資すことにしたい。

なお、本稿でとりあげた集落遺跡例は昭和53年度までの発掘調査報告書から得た。未集録の遺跡も多く、集録遺跡の地域的な偏りもあって、弥生時代の実態をカバーしきれていないが、大体の傾向は把握し得るものと思われる。

住居遺構例の報告書からの抽出にあたっては小時期区分の明らかなもの——例えば弥生時代中期前葉——についてのみ採用した。それらを小時期ごとに時代順に遺跡例をあげ、遺跡別に竪穴住居を分析し（付表2）、さらにそれらを集計して、項目ごとに小時期別の住居総数等をまとめた（付表1）。

I 竪穴住居の平面形式

方形・円形　九州地方の弥生時代竪穴住居の平面形式は方形平面と円形平面の二種がある。

方形平面は弥生時代全期間を通して住居総数の73%を占める。方形平面が時期別に占める割合は、前期48棟中に26棟52.1%，中期228棟中に134棟58.8%，後期315棟中に299棟94.9%で弥生時代前～中期には約半数を占め、後期には方形平面が圧倒的に多い（表1）。

方形平面を規模別（面積別）にみると、弥生時代後期は方形平面が主流になるので除いて、前～中期での割合を付表1から求めると、 $10m^2$ 以下：90.9%， $10m^2 \sim 20m^2$ ：87.0%， $20m^2 \sim 30m^2$ ：48.1%， $30m^2$ 以上：6.2%，全体で51.4%となる。

すなわち、方形平面の竪穴住居は弥生時代前期から中期にかけて全体の過半数を占めるが、 $20m^2$ 以下の小規模住居に限れば88.0%， $30m^2$ 以下では76.0%となり、方形平面は小型住居に主として採用され、かつ、時代が降るにしたがって増加の傾向にあることが明らかである。

円形平面の場合は、前～中期の住居総数に占める割合は48.6%で、半数弱にすぎないが、30m²以上の住居には圧倒的に多く、50m²以上の大型住居では全て円形平面である（表2）。

棟数の上からは方形平面と円形平面はほぼ同じであるが、円形平面は中・大型住居に多いことから、前～中期には円形平面が主流であったと云える。

後期前～後葉期に円形平面は一時途絶えるが、後期末葉には中期とは異なった形のものが現われる。例えば、大分県野津町日当遺跡で長方形に近い楕円形平面を示し、宮崎市宮崎学園熊野原遺跡、宮崎県都城市祝吉遺跡・堂地東遺跡では花弁型の円形・長方形平面がみられる。

鹿児島県王子遺跡ではすでに中期末～後期初頭期に花弁型が現われており、花弁型平面は中期末葉以降の時期において、九州南部地方における地方的特色を示すものであるろう。

住居棟数と規模 付表1から小時期別の住居棟数の変化をみると、前期末～中期初頭期と中期末～後期前葉期には時期区分の表記の方法に問題があってバラツキがみられるが、前期末葉から後期中葉にかけての住居棟数は各時期50～60棟程の安定した推移を示し、後期後葉期に90棟を超えて増加の兆しが現われ、同末葉に156棟を数えて急増している。

住居規模別棟数の変化を付表1の面積別棟数からみると、前～中期には20m²以下の小型住居が125棟45.3%で最も多く、20m²～30m²=54棟19.6%，以下10m²単位増えるごとに31棟、25棟、18棟、14棟、7棟、2棟(80～90m²)と漸次減少している。前～中期において、時期が降るにつれてやや大型住居が増える傾向にあるが、全般的には規模別による住居棟数差は後期程には顕著ではない。

中期末葉以降になると、この傾向は大きく変わり、大型住居が少なく、中・小型住居が増え、住居平面形式が円形主流から方形主流に変化する傾向と一致する。また、後期後～末葉に住居数が急増するのと比例して大型住居が増加している。

弥生時代には、後記のように掘立柱建物の大型住居が前期末には成立しており、集落内の住居構成が竪穴住居のみの場合と、掘立柱建物と竪穴住居が共存する場合とで竪穴住居の規模構成も異なってくると思われ、中期末以後の大型竪穴住居の急減は、それに代わるものとして掘立柱建物の増加も要因の一つと考えられる。

主柱本数 1棟の竪穴住居に使用される主柱の本数は、弥生時代には3本例を除いて0本から17本までの例がある。

付表1の面積別棟数をさらに分解して、主柱本数別に分けて前～中期にまとめて表3に、後期にまとめて表4に表わした。付表1と同様に（　）数字は円形平面、他は方形平面の棟数を示す。

前～中期では、主柱本数別に最大面積と最小面積で50m²の差を保つつつ、住居面積と主柱本数はほぼ比例関係にあることが表3の棟数分布にはっきり表われている。

主柱本数別の住居棟数をみると、前～中期では無主柱103棟31.8%が最も多く全体の約1/3を占め、次いで主柱2本70棟、6本35棟、4本32棟、8本23棟、7本12棟、9本9棟、1本8棟、11本8棟、12本5棟、その他の順に少なくなっている。とくに主柱5本例が少ないので、主柱数が住居規模に比例するなかで例外的な存在である。また、主柱2・4・6・8本の偶数本数

が主流であることも、縄文時代とは異なったこの時期の建築構造の特徴を現わしているものと思われる。

前～中期の主柱7本以上の住居には、主柱以外に床面中央に補助支柱2本あるいは4本をもつ例がある。

補助支柱2本の例は、主柱7本2例、主柱8本5例、主柱9本1例、主柱10本2例、主柱11本1例、主柱14本2例である。

補助支柱4本の例は、主柱10本・12本各1例がある。

支柱の掘形は主柱よりも浅く狭いことや、50m²以上の大型住居に多くみられることから、補助的な構造用材として使用されたものと考えられる。しかし、主柱7本以上72棟中に補助支柱をもつもの15例20.8%しかなく、構造用材としても常設ではなく、住居の構築時に臨時に使用したために痕跡が残らない例が多いとも考えられる。

平面形との関係は、前～中期では円形平面は主柱2本以下181棟中に13棟7.2%，主柱4本32棟中に19棟59.4%，主柱5本以上111棟中にわずか1棟のみである。すなわち、主柱2本以下は方形平面、主柱5本以上は円形平面に使いわけ、主柱4本には両平面形が認められる。

後期に入ると主柱数で最も多いのは2本121棟、次いで無主柱97棟、4本77棟、1本10棟、5本以上はわずか9棟で、12本1棟が最多主柱例である（表4）。すなわち、前～中期に比べると、主柱5本以上が極端に減少して無主柱、2本、4本に集中する。この傾向は、後期に入つて平面形式が円形から方形平面に統一されるのにもなって、主柱配置も定形化したことを見ている。

方形4主柱形式は弥生時代全期を通して存在するが、後期後葉にはその変形があらわれる。

第1図は変形4主柱の平面模式図である。仮りに、4隅の柱を主柱として、他の柱を間柱と呼ぶことにして、間柱1～5本の平面形式をそれぞれ方形4₁主柱～方形4₅主柱形式とする。

方形4₁～4₃主柱は柱を長方形に、方形4₄～4₅主柱は柱を正方形に配置し、一般的には間柱の多いほど規模が大きい。

遺構例は、間柱なしの4主柱79棟が最も多く、次いで4₂主柱11棟、4₁主柱7棟、4₃主柱6棟、4₅主柱3棟、4₄主柱2棟がある。

いまのところ、この変形4主柱は大分県下にしか存在しない形式であり、九州地方のなかの一地域的特色を示すものと云える。

関東地方では縄文時代晩期には4主柱形式が成立して、これが弥生時代に引継がれ、住居規模にかかわらず楕円形4主柱又は隅円方形4主柱が主流となり、無主柱は小規模住居に少数例あるにすぎない。

九州地方の場合は、弥生時代全期を通してみると、無主柱189棟30.1%，2主柱191棟30.5%，4主柱129棟20.6%であり、後期中葉までは無主柱、2主柱が主体で、後期後葉以後に4主柱が増えて、3つの形式が拮抗している。

したがって、同じ4主柱形式であっても、関東地方と九州地方では平面形や成立の過程が異なり、必ずしも同列には扱えないが、古墳時代に入ると全国的に方形4主柱の形式に均一化す

主柱負荷面積　主柱1本あたりの屋根加重負担の面積を、屋根面積のかわりに床面積で求め、各主柱数別の平均住居面積を出して、これを各主柱数で割った値が表3、4の主柱負荷面積である。

前・中期は住居規模と主柱数とが比例することから、主柱負荷面積もほぼ一定の値を得ることが予想される。

1主柱と2主柱は大きな値を示すが、4主柱以上は4.0m²から6.0m²までの範囲にある。とくに、4主柱から12主柱までは5.5m²前後の均一な値を示し、住居規模と主柱本数の比例関係が認められる。

但し、各主柱別に最大と最小で約50m²の差が生じているから、最大負荷面積は10m²前後、最小負荷面積は3m²前後の値を示す。

関東地方の縄文時代竪穴住居の場合は、主柱数は4～7本でその単位負荷平均面積は勝坂期約3.5m²、加曽利EⅠ期約4.0m²、加曽利EⅡ期約4.5m²である。

したがって、九州地方の弥生時代前・中期の平均負荷面積5.5m²は、縄文時代と比較して主柱1本当たり1m²増えて、住居構造の進歩が窺える。

後期では、無主柱、1主柱とも平均面積が前～中期より増え、4主柱の単位負荷面積も前・中期の5.4m²から7.2m²に増え、後期における主要3形式の構造は、前・中期よりはかなり発展したものとみなすことができる。

4主柱間柱付きの形式は表4には間柱を含めた単位負荷面積を示してある。間柱なしの4主柱形式より低い値を示すが、前・中期の平均値に近く、構造的には間柱とするよりもむしろ、掘立柱建物の側柱に近い役割をもつものと云える。

なお、後期の主柱5本以上の平均負荷面積は遺構例が少ないためにバラツキは大きいが、前・中期の円形平面住居の単位負荷面積の範囲内に入る値を示している。

九州地方の竪穴住居の平面形式は、上記の分析から次の三形式に分類することができる。

A：前～中期の円形平面をもつ中・大型住居で、主柱は4・6・8本が多く、面積にはほぼ比例して7本、9本以上17本までの主柱を竪穴側壁面に並行して円形に配置する。また、床面中央には2本または4本の補助主柱をもつ場合もある。

B：弥生時代全期を通して最も多い方形無主柱または方形2主柱の小型住居で、小数ではあるが1主柱形式も含まれる。

C：弥生時代全期にわたって存在する方形4主柱形式の中央住居である。後期後葉には間柱を4つ変形4主柱が現われ、間柱1～5本の数によって方形4₁～4₅主柱形式として扱う。

II 竪穴住居の構造形式

以上の記述から、弥生時代の九州地方竪穴住居の平面形式の特徴や変遷を、その規模や主柱本数と関連して、ほぼ明らかにし得たと思われる。この平面形式の特徴から上部構造の復原の手掛りを求めるほかに、焼失住居の炭化建築部材からも確実な資料が得られるが、残念ながら九州地方にはいまのところ良好な焼失住居例は得られず、同じ平面形式を山陽地方の焼失住居例が参考になる。また、時代はかけ離れるが、現代に生きる近世民家建築は、建築構造の復原に参考になる最も身近な具体例と云える。

前節では竪穴住居の平面形式をA・B・C型の3形式に分類できたので、それに基づいてそれぞれの形式の復原を試みることにする。

A型 この型式の特徴としてあげられる偶数の主柱本数は、建築構造上の何らかの規制を受けた結果であると推定できる。

また、主柱以外に床面中央に2本または4本の補助支柱も小屋組架構の補助用材としての役割を負うものと思われる。

竪穴の平面形は楕円形よりも正円形が多く、その場合に主柱配置も竪穴壁面に沿って並行に正円形に配置されていることから、屋根の形式は棟を上げた寄棟造りや入母屋造りではなく、円錐形であったと思われる。また、主柱が偶数本数であることは相対する2本1対の関係を意味するものとして、第1図のような梁組と叉首組によって円錐形小屋組を形成していたものと推定される。

主柱6本の梁組はキ字状、主柱8本の梁組は井桁状になる。それぞれの端部で叉首尻を受け、叉首上端は中央頂部の短い円柱状キィポストの側面に枘差しにして集中させる。叉首上に上下二段に架け渡した母屋桁上に垂木を円錐形に配置するのであるが、母屋桁は円環状につくるために蔓草を束ねたものを使用する。垂木は桁から地面上に降ろして、屋根は円錐形の地上葺降し形式になる。

9本以上17本までの主柱の多い形式の場合も、キ字状梁、井桁状梁を桁上に架け渡して上記のような円錐形小屋組をつくり、キ字状梁、井桁状梁の梁組の交点に支柱を立てて補強したものが補助支柱2本または4本の例である。

このような円錐形屋根形式は、四国地方の砂糖しほり小屋に伝わる形式を参考にしたものである。キィポストの方法は技術的にはかなり進歩した方法であるから、頂部では短かい棟木をあげて、円錐形に近い寄棟造り屋根であったとも考えられる。

B型 無主柱、1主柱、2主柱ともに小型長方形平面であり、同じ外観をもっていたと推定される。主柱は直接に棟木を支持するもので、棟木と地面上に垂木を架け渡して、寄棟造りの屋根をつくる。無主柱の場合は、2組の合掌を地面上に立てて棟木をあげ、2主柱形式と同様に垂木を配って寄棟造りの方錐形屋根をつくる。

C型 方形4主柱形式の中規模住居で、主柱間の柱間中央に間柱をもつものもある。B型とは同系統の構造形式と考えられるから、柱上に桁・梁を架け、梁上に合掌を組み棟上をあげて

寄棟造り屋根を地上葺降しとする。

長方形平面をもつ方形4₁～4₃主柱形式の場合は、3組の合掌が棟木を支持する架構形式である。

主柱配置が正方形の平面配置をもち中・大型住居に多い方形4₄～4₅主柱形式の構造は、梁間が大きいので、前記の他の例のように棟木から直接に垂木を地下に降ろす形式には構造的に無理があり、A型のように短かい棟を上げた四方葺降しの方錐形の寄棟造り屋根の構造が考えられる。

以上のA・B・Cの三つの構造形式は、いずれも寄棟造りに復原した。入母屋造りに復原することも可能であるが、当地方に現存する近世民家は全て寄棟形式であり、弥生時代以来の伝統様式を伝えるものとみるべきであろう。

III 壁穴住居の屋内施設

周溝 弥生時代全住居649棟に対して周溝を保有する住居は162棟、25.0%で全体の4/1で全般的に少ない。時期別には(表5、付表1)、中期前葉に60%を占めて突出し、前期から中期初頭にかけて少なく、中期中葉以降は平均的な低さを示す。周溝は一般的には床面の温氣抜き又は排水用の機能をもつと考えられるから、周溝の多い割合をます中期前葉は多雨な気候であったことを示すであろうか。

周溝と関連して、付表1・2にとりあげた床溝がある。これは中央ピットと周溝を連結して、さらに壁穴側壁に暗渠を設けて外部にのびる排水溝に進なる例もある。

床溝をもつ住居はわずか25例のみで少ないが、周溝が突出して増える中期前葉以降に出現している。

炉 弥生時代全期を通した炉の平均保有率は41%で半数に満たない。時期別には前・中期に少なく、中期末葉以後に増加して過半数を占めるようになる。

炉の形式は地床炉か、あるいは床面が焼けた程度のもの(焼面)も含み、中期から後期にかけて壁穴炉が増えるとは云え、炊事用の炉は屋外炉が主であったことを思わせる。

中央ピット 床面の中央にある平面円形又は方形の穴を中央ピットと呼び、同様のもので壁面寄りに位置するものを貯蔵穴として区別したが、実際の機能は明らかではない。深さは30cm程から70cm程の深いものまで、多くは穴の埋土中に炭化物が混じる。浅くて壁面が焼け、炉址と認められるものもあるが、多くは焼けていない。また、明らかに柱痕跡と思われる細く深い掘形をもつ例もある。

柱穴でも炉址でもない中央ピットに、排水溝が取りつくものは、床面の温氣抜きの用途とともに貯蔵穴としての役割も考えられる。また、穴の周囲に凸堤帯を巡らせたり、方形平面の深い穴の中央に円形平面の深い穴を堀った二段掘りの例は、貯蔵穴や祭祀的用途の可能性も考えられる。

全期間の平均保有率は21.9%で低いが、時期別には周溝と同様に中期前葉に集中して78.3%

の高率を示し、他の時期は炉の傾向とは反対に前・中期に20~40%でやや高く、後期には急激に減少する。

貯蔵穴 多くは竪穴壁面に接して設けられ、方形平面の場合は長辺の一方の中央側壁に接して設けられることが多い。円形平面の住居で中央ピットと並ぶものや、長方形の短辺中央あるいは隅に設けるものも若干数存在する。

貯蔵穴の機能は文字通り貯蔵のための穴とすべきものもあると思われるが、鹿児島県鹿屋市王子遺跡では、埋土上面が床面として生きており、建築儀礼などのような用途の可能性も考えられる。

貯蔵穴の保有率は41.9%で炉とほぼ同率を示し、前・中期に低く、中期末葉以降に増加する傾向についても炉と同じである。この傾向は、方形平面に貯蔵穴が多いことを示すもので、中央ピットが円形平面に多く、しかも前・中期に保有率が高く、後期に急減する傾向と対照的であることから、中央ピットも貯蔵穴も互いに似たような機能をもち合せていたとも考えられる。

ベッド ベッド状遺構とも云われ、竪穴側壁面に沿って中央床面よりも10cm前後、一段高くなっている。

中期後葉に1例あるが、中期末葉以降の方形平面住居の盛行とともに発達したもので、その形状は竪穴側壁に沿って幅1m以下、長さは長方形平面の短辺いっぱいにとるもの、一方に片寄せて長さ2m程とするもの、竪穴壁の二辺にまたがるL字型、三辺にまたがるコ字型に配置し、あるいはこれらのうちの二組を組合せる形式もある。

ベッドの用途としては寝台としてのみでなく、収納スペースや祭壇などが考えられるが、その大きさと形状からは寝台として最も多く使われたものであろう。

中期末～後期初頭の鹿児島県王子遺跡では、ベッドが方形平面の三方または四方に張出し、円形平面ではベッドが全周して隔壁を設け、住居平面が花弁型を呈するものがある。

この花弁形は後期前葉の宮崎県都城市堂地遺跡ではさらに多弁化した大型住居に発展し、張出し部がベッド状になっていないものもみられ、後期末葉の都城市祝吉遺跡や宮崎市熊野原遺跡に引継がれる。

他の地方では福岡県八女市地方に部分的な張出しひべッドの例が若干存在するのみで、鹿児島県、宮崎県以外の地方には現在までのところ流布してはいない。

ベッドの保有率を中期末以降について求めると約30%である。ベッドが寝台としての役割をもっていたとすれば、この保有率はいかにも低率であり、100%でなければならないはずである。

高さわずか10cm程のベッドを実際に寝台として利用する際には、上にそだやわらを敷き、むしろやアンペラ状の敷物を重ねたであろうから、必ずしも土壇は必要ではなかったと云うことこの保有率の低さが証明しているのではなかろうか。

また、南九州地方の花弁形平面の住居において、張出し部がベッド状になっているものと、平坦なものが両立していることも上記の類推にかなうものであろう。

建替え 同じ竪穴をそのまま、あるいは拡張して建物の改築を行うことで、弥生時代におい

では、東日本では殆んど場所を移して建替えるために、同位置の建替えは極めて少ない。山陽道の中期住居では盛んに行われて1棟で4～5回の例もみうけられる。

九州地方ではいちおう前期から後期にわたって存在するが、中期に主として分布する。建替えは1回のみで、遺構例も山陽地方に比べれば少なく、後期の方形平面住居が主流になると同一竪穴での建替えはあまり行われなくなる。

IV 掘立柱建物と高床式建物

平地上に掘立柱を用いて建てる建物のうち平屋建てを掘立柱建物、床を高く上げて上・下層または上層のみを利用する2階建てを高床式建物として区別する。

九州地方ではとくに北九州に多くみられ、前期末以降、竪穴住居の隆盛にともない、竪穴住居と共に存して発見されることが多い。竪穴住居と異なり、掘立柱の場合は時期の比定が難しく、多くの遺構例が報告されているけれども、時期の確かな例は少なく、以下には少数例をあげるにとどめた。

九州地方の弥生時代の掘立柱建物の特徴をあげると桁行（5間～8間）梁間2～5間で規模が格別に大きいことである。福岡県行橋市竹並遺跡（前期末～中期初頭）、福岡市久保園遺跡（中期中葉）、福岡県北九州市辻田遺跡（中期）などは超大型の例であり、規模は小さくなるが、鹿児島県鹿屋市王子遺跡（中期末～後期初頭）の掘立柱建物は妻側中央部に壁面から離れて独立した棟持柱をもつ点で、規模の大きさにも劣らない格式を備えたものと考えられる。棟持柱をもつために高床式建物に結びつけられ易いが、平面形は不整形で桁行側柱の柱筋が揃わず、梁間2～3間であるなど明らかに掘立柱建物の特徴を示す。

棟持柱の類例は王子遺跡とほぼ同時期の岡山県津山市沼E遺跡と同県哲西町土井遺跡がある。これら二例は梁間1間であるが、梁間は広く、また桁行が長いために屋内の棟造りに側柱とは柱筋のずれる位置に柱を立て、棟木を直接に支持する形式をもつ。

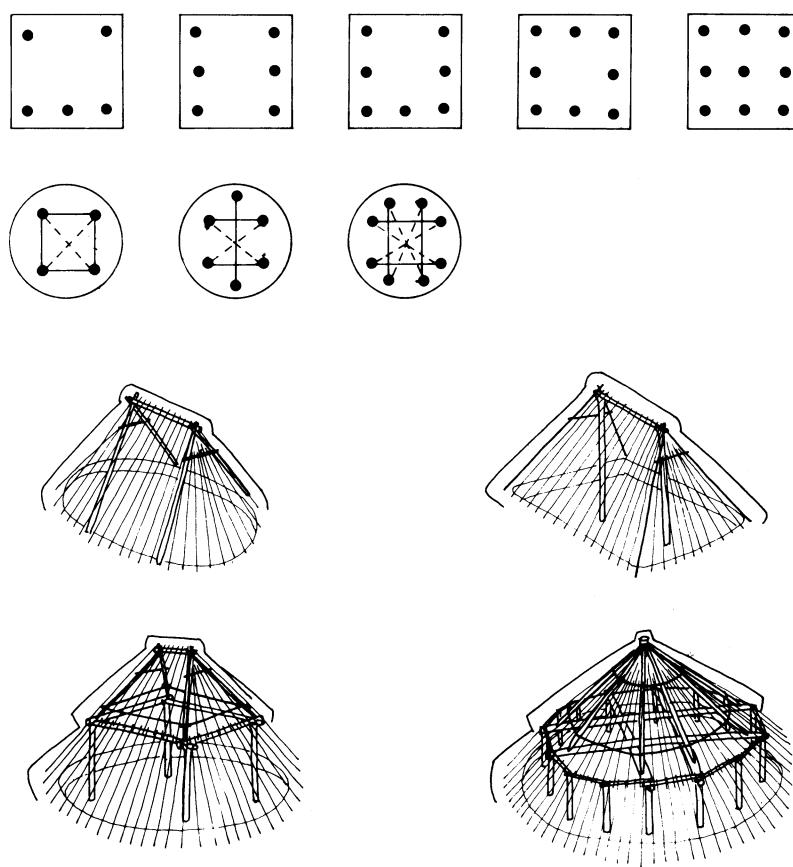
棟持柱をもつ高床式建物は、弥生時代中期の銅鐸・土器に描かれているが、遺跡例としては時代が降り、神戸市松野遺跡（6世紀前半）など、きわめて発見例が少ない。現存例で伊勢神宮社殿等の神殿建築に形式遺存することや、古代における遺跡例の少ないと、東南アジアにおける民族例からみて、棟持柱は構造材として実用的に用いたのではなく、はじめから象徴的なものとして使用された可能性が強い。

九州地方の高床式建物の遺構例では、湯納遺跡（福岡市・中期）の建築部材がその具体的な構造を示してくれ、また、谷間の流路沿いに桁行2間、梁間1間の3棟の高床式建物跡がある。発見部材では上・下層とも草壁の外壁をもつとされるが、平面からのみでは下層を間仕切っていたがかどうかは分らない。

九州地方の高床式建物の発掘遺構例としては、桁行1～2間、梁間1間の平面にほぼ限定できる。梁間寸法は2m～3.5m前後で、桁行2間の場合は1間の柱間寸法は梁間に等しいか狭い。つまり、梁間にに対して、桁行2間の比率は1.5～2倍である。桁行1間・梁間1間の例にも同

じ比率を示す例が福岡県辻田西遺跡（中期）、鹿児島県王子遺跡などにあり、中国地方にも例がある。これらは桁行2間の場合の中央柱を除いた形式をもつもので、桁行2間の場合と同様の高床式建物とすれば、桁行2間の中柱に代るもの、例えば、土壁や板壁を設け、四隅の柱と壁面で上層の加重を支えていたと考えられる。

このような例からみて、鹿児島県王子遺跡における集落の構成は、神殿あるいは集会所としての棟持柱のある掘立柱建物、首長とその家族のための大型住居、高床倉庫、一族郎党の小堅穴住居群とから成るものと推定される。



第1図 竪穴住居構造模式図

引用遺跡・文献

引用文献については次のように略記した。

九州縦貫	=九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告
山陽新幹線	=山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告
冷水バイパス	=冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告
福岡南バイパス	=福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告
今宿バイパス	=今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告
九州横断	=九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
八木山バイパス	=八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告
浮羽バイパス	=浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
県文報	=一県文化財調査報告
県教	=一県教育委員会
以下市・町・村についても同じ	
(福岡県)	
福岡市	野多目括渡遺跡 山口讓治・市文報93・市教1983 千里シビナ遺跡 塩屋勝利・市文報88・市教1982 久保園遺跡 市文報91・市教1983 比恵遺跡 横山邦継・市文報94・市教1983 有田・小田部第3集 井沢洋一他・市文報84・市教1982 宮の前遺跡 福岡県労働者住宅生活協同組合1972 神松寺遺跡 山崎純男他・市文報45・市教1978 野方勧進原遺跡 市文報64・市教1981
大野城市	中・寺尾遺跡 馬田弘稔他・市文報1・市教1977 仲島遺跡 舟山良一他・市文報8・市教1981
北九州市	辻田西遺跡 栗山伸司他・市文報13・北九州市教育文化事業団1982 辻田遺跡 栗山伸司他・市文報35・市教1980 屏賀坂遺跡 上村佳典他・市文報23・市教1977 香月遺跡 中村修身他・市文報30・市教1979
小郡市	北牟田遺跡 酒井仁夫・森田勉・九州縦貫XXXI・県教1979 津古内畠遺跡 柳田康雄・第5次調査報告・県教1974 牟田々遺跡 佐々木隆彦・市教1977 大坂井遺跡Ⅰ～Ⅲ 片岡宏二他・市文報11・13・14・市教1981～2 大坂井Ⅱ遺跡
春日市	三国小学校跡 片岡宏二・市文報10・市教1981 八坂石塚遺跡Ⅰ・Ⅲ 速水信也他・市文報19・市教1983 門田遺跡 井上裕弘他・山陽新幹線7・県教1978 辻田遺跡 小池史哲他・山陽新幹線12・県教1979 惣利東遺跡 丸山康晴・平田定幸・「春日地区遺跡群Ⅱ」・市文報14・市教1983 赤井手遺跡 丸山康晴・市文報6・市教1980 岡本遺跡 丸山康晴・平田定幸・市文報7・市教1980
行橋市	竹並遺跡 友石孝之他・竹並遺跡調査会1978 剣塚遺跡 中間研志・九州縦貫XXIV・県教1978
筑紫野市	大島遺跡 浜田信也・中間研志・冷水バイパス・県教1982 野黒坂遺跡 松岡史他・福岡南バイパス報1・県教1970 八隈遺跡 松村一良他・九州縦貫VII・県教1976 山ノ口遺跡
八女市	野口遺跡 酒井仁夫・関晴彦・九州縦貫IX・県教1977 坊野遺跡 同上 西中ノ沢遺跡 同上 道添遺跡 同上
筑後市	狐塚遺跡 小田富士雄他・市教1970 甘木市
大宰府町	下原遺跡 佐々木隆彦他・九州横断2・県教1983 上々浦遺跡 佐々木隆彦他・九州横断1・県教1982 佐々木隆彦・町教1977
粕屋町	古大間池遺跡 佐々木隆彦・町教1977
志摩町	御床松原遺跡 井上裕弘他・町文報3・町教1983
二丈町	石崎曲り田遺跡 橋口達也他・今宿バイパス8・県教1983
前原町	三雲加賀石I遺跡 柳田康雄他・三雲遺跡I・県文報58・県教1980

三雲番上Ⅱ遺跡	同上
三雲郡の後遺跡	同上
三雲八反田Ⅱ遺跡	柳田康雄他・三雲遺跡Ⅱ・県文報60・県文報60・県教1981
三雲仲田Ⅰ遺跡	柳田康雄・小池史哲他・三雲遺跡Ⅱ・県文報60・県教1981
三雲サキゾノ遺跡	同上
三雲中川屋敷	柳田康雄他・三雲遺跡Ⅳ・県文教65・県教1983
湯納遺跡	栗原和彦他・今宿バイパス4~5・県教1976-7
上鏡子遺跡	
那珂川町	地余遺跡
	田平徳栄他・東急不動産株式会社1980
	今光遺跡
古賀町	久保長崎遺跡
	松岡史・福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告・県教1973
	高木遺跡
	池辺元明他・町文報2・町教1983
	浜山遺跡
	酒井仁夫・児玉真一・町文報1・町教1982
津屋崎町	今川遺跡
	酒井仁夫・伊崎俊秋・町文報4・町教1981
宗像町	東郷遺跡
	登り立遺跡
若宮町	柳ヶ谷遺跡
	{ 酒井仁夫・池辺元明・九州縦貫Ⅷ・県教19
	児玉真一他・若宮宮田工業団地埋文報3・県教1980
	都地原遺跡
	松村一良・九州縦貫X VI・県教1977
	茶臼山遺跡
	酒井仁夫・九州縦貫X I・県教1977
	小原遺跡
	中間研志・九州縦貫X II・県教1977
鞍手町	向山遺跡
	浜田信也・八木山バイパス・県教1983
穂波町	ウラン山遺跡
	橋口達也他・町文報1・町教1976
	スダレ遺跡
	井上裕弘他・町文報4・町教1981
夜須町	金山遺跡
	浮羽バイパス埋文報1・町教1983
吉井町	塚堂遺跡
瀬高町	大道端遺跡
(大分県)	関晴彦・山本信夫他・九州縦貫X IV・県教1977
大分市	守岡遺跡
	昭和50・51年発掘調査概報・町教1979
	多武尾遺跡
	松田政基他・調査概報・市教1982
	多武尾遺跡
	松田政基他・調査概報・市教1982
宇佐市	台ノ原遺跡
	真野和夫他・県文報33・県教1975
竹田市	楠野遺跡
	玉永光洋他・県文報63・県教1983
	ネギノ遺跡
	賀川光夫他・県文報35・県教1976
野津町	日当遺跡
	牧尾義則他・県文報58・県教1982
大野町	辻中遺跡
	松木遺跡
	後藤宗俊・清水宗昭他・「大野原の遺跡」・町教1980
	二本木遺跡
	同上
	夏足原遺跡
(佐賀県)	
佐賀市	琵琶原遺跡
中原町	姫方原遺跡
神崎町	尾崎利田遺跡
基山町	城ノ上遺跡
(熊本県)	
西原村	谷頭遺跡
西合志町	松村道博・谷頭遺跡調査団1978
(宮崎県)	
宮崎市	前原西遺跡
	北郷泰道・宮崎学園都市埋蔵文化財発掘概報Ⅱ~Ⅲ・県教1981-2
	前原南遺跡
	同上
	熊野原遺跡
	同上
	堂地東遺跡
	同上
	宮崎学園14遺跡
	同上
清武町	大萩遺跡(2)
(鹿児島県)	田中茂他・県教1975
隼人町	小田遺跡
溝辺町	青崎和憲・日高孝治・鹿児島県住宅供給公社1981
	諏訪昭千代・弥栄久志・九州縦貫Ⅱ・県教1978

表1. 時期別方形平面住居の割合(%)

前 期	後	葉	31.3
	末	葉	56.2
中 期	初	頭	36.6
	前	葉	23.7
	中	葉	62.0
	後	葉	68.9
	中期末～後期初		81.4
後 期			94.9

表2. 規模別円形平面住居の割合(%)

規模	前～中期	後 期	全 期
10 20 30 40 50 60 70 80 m ²	9.1	0	5.1
	13.0	0	5.7
	51.9	1.1	20.0
	87.1	13.6	39.8
	92.0	15	59.6
	100	25	88.0
	100	50	93.8
	100	100	100
	100	50	75.0

表3 弥生時代前中期主柱規模棟数表

主 体 本 数	単 位 面 積 別 棟 数								(合計)	m ² 平均面積	主 柱 負荷面積	
	10	20	30	40	50	60	70	80 m				
0	29 (2)	48 (3)	14 (3)	2	1 (1)				103	14.5	m ²	
1	4	4							8	11.2	11.2	
2	7	39 (1)	15 (1)	4 (1)	1 (1)				70	18.7	9.3	
4	1 (1)	6 (5)	5 (10)	(3)					32	21.6	5.	
5		(2)		(1)	(1)				4	29.9	6.0	
6		(2)	(12)	1 (11)	(4)				35	34.6	5.8	
7			(1)	(6)	(3)	(3)	(2)		12	40.6	5.8	
8			(1)	(8)	(7)	(1)	(1)		23	44.4	5.5	
9			(1)	(1)	(2)	(5)	(2)		9	50.9	5.6	
10					(2)	(3)	(1)	(1)	6	54.9	5.5	
11					(1)	(2)		(2)	8	56.2	5.1	
12					(1)	(6)	(1)		5	64.7	5.4	
13					(1)	(1)	(1)	(1)	2	58.7	4.5	
14					(1)		(1)		3	65.3	4.7	
15							(1)		(1)	1	69.5	4.6
16					(1)		(1)		2	63.4	4.0	
17							(1)	(1)	1	69.5	4.1	
(合計)	41 (3)	97 (13)	34 (29)	7 (31)	2 (26)	(22)	(12)	(5)	(2)	324		

表4. 弥生時代後期主柱、規模、棟数表

主柱 本数	単位面積別棟数									棟数	平均面積	() 円形平面棟数 主柱負荷面積
	10	20	30	40	50	60	70	80				
0	12	43	20	7	(1)	(1)	(2)			86	18.9m ²	m ²
1	2	6	1		(1)					10	16.9	16.9
2	4	55	43	15	4					121	21.5	10.7
4	1	16	29	(1)	19	(3)	4	1	(1)	1	(1)	
4+1			1	1	2					4	38.6	7.7
4+2			3	1	1	1				6	35.1	5.8
4+3			2	3			1			6	35.5	5.1
4+4				2						2	35.4	4.4
4+5					2					2	44.2	4.9
5					(1)	(1)				1	3	57.8
6					(2)					2	32.9	5.5
7					(1)					1	34.2	4.9
8					1					1	49.0	6.1
9												
10										(1)	1	80.0
12										(1)	1	78.7
合計	19	120	99	(1)	48	(9)	15	(3)	3	(1)	1	(1)
										(1)	1	303

表5. 堅穴住居内施設保有率

時 期		周溝	炉	中央ピット	貯蔵穴	ベッド
前 期	後葉	0	37.5	43.7	12.5	—
	末葉	12.5	25.0	37.5	6.2	—
中 期	初頭	12.0	47.6	38.1	28.6	—
	前葉	60.0	25.0	78.3	15.0	—
	中葉	26.0	16.0	30.0	34.0	—
	後葉	21.3	34.4	23.0	41.0	1.6
	末葉	11.8	64.7	5.9	70.6	17.6
中期末～後期初		24.5	5.7	26.4	56.6	41.5
後期	前葉	7.7	46.1	—	30.8	7.7
	中葉	33.3	57.4	7.4	75.9	55.5
	後葉	22.8	68.5	5.4	46.7	21.7
	末葉	22.6	46.5	4.3	47.2	25.2
平均保有率		25.0	41.0	21.9	41.9	

付表Ⅰ. 弥生時代堅穴住居分析表 一九州地方一

	前 期		中 期				中末 後・初	後 期			
	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉	後葉		前葉	中葉	後葉	末葉
面積m ²	1010	2	6	5(1)	3(1)	8(1)	3	3	10	2	8 (4)
	2020	2(1)	9(4)	9(4)	7(2)	16	27(1)	10	17(1)	7	37 56
面積	30	1(3)	1(3)	1(7)	4(10)	6(3)	9(2)	4	9(3)	2	20 43(1)
	40	(2)	1(2)	(6)	(13)	1	2(4)		4(4)	2	12 23(7)
別棟数	50	(3)	1(3)	(6)	(4)	(5)	1(2)		(2)	3	3 11(3)
	60		(2)	(1)	(6)	(6)	(3)		(3)		1 2(1)
	70	(2)			(9)	(2)	(1)				1(1)
	80			(1)		(2)	(4)				(1)
	m ²						(2)				1(1)
遺跡数		5	7	18	17	13	21	4	4	9	15 21 34
住居数		16	32	41	59	50	61	17	53	13	54 92 156
面積m ²	最大	63.3	53.5	55.4	69.5	74.2	89.9	28.6	59.3	39.0	40.8 51.8 86.0
	最小	7.3	4.9	7.5	5.1	12.3	7 0	5.2	4.0	6.6	9.0 5.7 5.9
	平均	30.1	22.8	21.6	35.2	26.6	28.2	16.5	22.1	19.7	23.7 21.9 27.6
最大径m	長径	9.6	9.2	10.3	9.9	10.5	10.9	6.2	9.0	6.6	7 5 7.4 10.0
	短径	.8 5	7.6	9.6	9.0	9.0	10.1	4.7	8.5	6.1	6.0 7.0 9.7
主柱本数	1	5	16	11	13	20	15	6	10	4	10 19 52
	2	1		3	2	1	1		1		4 4
	3		3	1	1	7	20	10	27	6	42 29 36
	4	3	3	7	6	1	6	1	8	3	2 35 55
柱	5		2	1					1		3
	6	2	3	4	15	6	5		2		1 1
	7	1	1	2	3	2	1		1		1
	8	3		4	11	4	2		2		1
	9		1	2	3	1	5				
	10					3			1		1
別棟数	11		3		3	1					1
	12				2		3				
	13		1		1						
	14			1	2		1				
	15				1						
	16		1	1							
	17				1						
周溝	—	4	5	36	13	13	2	13	1	18	21 36
炉	6	8	20	15	8	21	11	3	6	31	63 74
中央ピット	7	12	16	47	15	14	1	14		4	5 7
貯蔵穴	2	2	12	9	17	25	12	30	4	41	43 75
建替	1	3	2	14	3	3		4			3
床溝				4	4	3		3		3	2 6
ベッド						1	3	22	1	30	20 40

付表 2-1 遺跡別堅穴住居分析表

時 期	遺 踪	所 在	棟 数	堅穴面積 m ²			最大径 m	面積別棟数 m ²								主 柱 本 数	別 棟 数	周 溝	中央ヒート	断 道	床 溝										
				最大	最小	平均		10	20	30	40	50	60	70	80	0	1	2	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前 期	後葉	刺 島	福・茨城野市	3	31.2	9.7	23.2	6.3	6.3	1	1	1				1	1	1											1	2	
		大 野	島 黒坂	3	60.1	21.6	42.7	9.0	8.5		1	1	1						1									3	2		
		ウ ラ ン	山 加賀 貝石 I	2	13.7	7.3	10.5	3.9	3.5	1	1								2	2	1	2					1	5			
		原 前	原 原町	7	30.6	17.4	28.5	7.5	6.9	2	2	1	2						2	2	1	2					1	1			
		松 岩	加賀 貝石 II	1	63.3					9.6	8.4				1																
	末葉	御 床	松 原	小 郡 市	1	18.0			18.0	4.5	4.0	1					1													1	2
		北 田	牛 田	4	15.4	4.9	12.5	6.2	3.4	1	3							1	3									3	2		
		津 古	内 煙	3	35.3	21.6	30.7	6.7	6.7		1	2																1	1		
		門 田	田	4	44.5	7.0	28.1	9.0	6.3	1	1	1	1				4												4	7	
		野 田	黒 坂	7	15.8	7.1	10.7	4.6	3.6	4	3							7												2	
	未葉	並 行	篠 山	11	53.5	10.2	32.5	9.2	7.6	4	2	3	2				3	1	2	3	1	1	4						1	2	
		渡 沢	町	2	12.2	11.3	11.7	4.2	3.7	2								2												1	
		野 田	目 指 渡	福 國 市	1	20.8							1					1											1	1	
		香 月	北 九 州 市	1	78.4														1											1	1
		想 利	東 タ 夕	春 日 市	3	11.5	9.9	10.9	4.0	3.0	1	2						1	1	1									2	1	
中 期	中期 初頃	東 小 郡	市	1	18.8					5.1	4.7	1																	1	1	
		津 古	内 煙	"	43.26	7.9	20.0	6.5	6.3	2	2							1	1	1	1							1	1		
		竹 並	並	志 摩 市	2	17.6	12.6	14.8	5.1	4.4	2							1	1										2	1	
		加 貝 石 I	前 原 町	2	49.8	28.2	39.0	9.6	8.4		1	1																1	1		
		千 里 ヒ バ ナ	前 原 町	1	38.3				7.0	6.7	1									1								1	1		
	初頭	車 田	田 坂	小 郡 市	1	47.7			8.0	7.6	1									1								1	1		
		八 坂	石 塚	"	22.0			5.9	3.8	1									1								1	1			
		北 田	田 坂	9	32.7	7.5	16.0	6.7	6.0	3	3	2	1				5	1	1	1						5	3				
		津 古	内 煙	2	13.6	11.4	12.5	4.3	3.9	2								1	1								2	1			
		竹 並	行 槗 市	1	13.2			4.4	3.0	1																	1	1			
	前葉	野 田	黒 坂	筑紫野市	7	55.4	11.6	33.9	8.4	8.4	2	1	1	2	1		1		1	1	1	1					1	5			
		古 足	山	古 足 町	1	44.6			7.1	7.1	1																	1	1		
		今 金	山	津屋崎町	1	28.3			6.0	6.0	1																		1	1	
		金 台	原 E	夜 伏 町	2	42.4	38.5	40.4	5.5	5.2	1																1	2			
		大 佐	宇 佐 市	22.5																							1	1			
初頭	初頭	門 戸	戸 田	福・春日市	1	11.8			3.8	3.2	1						1											2	2		
		竹 井	戸 田	二 丈 町	2	33.6	21.6	27.6	6.8	6.3	1	1															1	1			
		加 貝 石 I	前 原 町	1	25.3			5.8	5.5	1																	2	1			
		大 分 市	大 分 市	1	48.4			7.7	6.8	1									2	3	2					7	2				
		住 田	西 頭	北 九 州 市	3	55.4	21.2	43.1	8.4	8.0	1	2							1	1	1	1				3	2				
	前葉	大 佐	坂 石 島	小 郡 市	8	62.9	15.1	35.1	8.9	8.4	2	1	2	2	2	1	2	1	1	3	1					2	5				
		八 仲	坂 石 島	"	12.0			4.1	3.0	1																	2	2			
		大 野 城 市	下 仁 施	大 野 城 市	2	63.6	63.6	63.6	9.0	9.0	2															3	3				
		甘 木 市	下 仁 施	甘 木 市	5	22.8	8.7	17.6	6.4	5.2	1	1	3				3	1	1	1						7	2				
		古 大 間	池 石 岩 曲 田	柏 屋 町	7	39.3	20.4	30.9	7.3	6.8	3	4							2	3	2					1	1				
	中葉	ウ サ ル ナ	ダ レ ベ	二 丈 町	1	63.6			9.0	9.0																1	1				
		總 沖	行 槗 市	4	39.1	5.1	26.7	7.3	6.7	1	1	2							1	1	1	1				3	1				
		65.9	8.7	42.2	9.9	9.0	2	1	2	3	4	3				3	1	3	1	2	1	1	1	11	14						
		番 上	日 本	1	31.3			6.4			1															1	1				
		御 床	松 岩	志 摩 町	2	15.5	15.4	15.5	4.8	3.6	2							1	1	1						2					
	後葉	ケ ャ ワ	原 原 町	若 宮 町	4	63.6	41.2	54.1	9.7	8.8	1	1	1							1	1	1	2			4	3				
		方 万	原 町	佐 佐 木 町	1	25.0	17.8	21.4	5.0	5.0	1	1	1													1	1				
		久 保	園	福・福岡市	2	74.2			74.2	10.5	9.0	2														1	1				
		大 八	坂 石 塚	小 郡 市	19	63.3	7.3	19.9	4	8	5	1	1				10	1	3	1	1				3	1					
		井 附	石 塚	"	12.3			4.1	3.0	1								1								1	1				
中 期	中期 後半	岡 門	門 戸	春 日 市	1	6.8			3.4	2.0	1							1								1	1				
		門 戸	赤 井	64.5	5.4	5.4	15.9	10.2	5.3	2	2	1	1			3	3								2	1					
		手 岩	坂 尾	8	50.3	26.3	39.8	8.2	8.0	3	2	3						4	2	1						4	5				
		井 附	坂 尾	筑紫野市	1	18.8			5.7	3.3	1							1								1	4				
		大 野 城 市	大 野 城 市	15.9	8.9	12.3	4.3	3.7	2	3	1						3	1	1						1	4					
	後葉	二 丈 町	寺 尾	福・小 郡 市	1	12.6			4.4	3.0	1														1	1					
		前 原 町	前 原 町	2	52.9			8.3	8.2	2								1	1	1					1	2					
		加 貝 石 I	大 野 町	2	67.0	41.2	54.1	9.7	8.8	1	1	1							1	1	1					1	2				
		中 伸	竹 尾	大 野 町	1	37.0			6.6	6.1	1															1	1				
		高 柳	ケ ャ ワ	志 摩 町	2	28.1	12.6	19.6	5.7	5.7	7	5					4	3	3							7	2				
後 期	後葉	反 田 I	福・大 野 町	4	33.5	7.0	18.5	6.6	6.1	1	1	1							1	1	2					2	2				
		上 II	大 野 町	3	72.8	47.1	57.6	9.5	9.5	1	1	1							1	1	1					2	2				
		番 サ キ	木 原	1	30.2			6.2	6.2	1															1	1					
		キ ノ	原 原 町	志 摛 町	12	28.1	12.6	19.6	5.7	5.7	7	5																			

付表 2-2 遺跡別堅穴住居分析表

所在地の県名は福(福岡県)・大(大分県)・佐(佐賀県)・熊(熊本県)・宮(宮崎県)・鹿(鹿児島県)

被災地の業者は福(福岡県) 大(大分県) 佐(佐賀県) 熊(熊本県) 吉(吉

新」といふ時期に含めて付表3に示す)を用いて、各年次別に算出された。

付表2において2時期にわたる遺跡は、中期末～後期初頭を除いて、新しい時期に含めて付表1に表記した。

周溝・炉・中央ピット・貯藏穴・床溝・ベッドについてはそれらを保有する住居数を示し、不明付を1の単位面積別棟数の()内数字は旧形平画の住戸数。他は古形平画の住戸数を表す。